

飛田就一教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 奥 地 正

飛田就一先生の定年によるご退職にさいして、『立命館経済学』において退任記念論文集を特集し、ここに刊行することになりました。

飛田先生は1995年3月31日をもって、定年によって立命館大学教授の職を退かれます。先生は1963年に、立命館大学に非常勤講師として就任されました。それ以来今日まで32年の長きにわたって、立命館大学および経済学部の発展のために尽力してこられました。この間の先生の多大のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ここにささやかながら記念論文集を編集・刊行し、先生に贈呈することになりました。

飛田先生は1929年に大連市（現・中華人民共和国のターリエン）でお生まれになり、戦後、1950年に京都府立鴨沂高校を卒業されましたが、その前後に病をえられ、ご卒業後も4年間は、入院・手術・療養の生活を余儀なくされました。その後、1954年に立命館大学文学部哲学科に入学され、同大学院文学研究科哲学専攻において研鑽を積まれた後、1963年に立命館大学の非常勤講師に就任されました。以来32年、1969年には経済学部助教授に、74年には同教授に昇任されましたが、この間、哲学・論理学・ドイツ語の担当者として教育と研究に従事してこられました。また、龍谷大学・大阪大学など10指に近い大学で、哲学・論理学などの非常勤講師を勤めてこられました。1980年9月から約1年間はドイツ連邦共和国フランクフルト大学の客員研究員として、国際的な研究交流を果たしておられます。

飛田先生は日本哲学会など7つの学会に所属され、その主な研究業績は『知性の探究』（1979年）をはじめとして編著書5冊、翻（監・共）訳書は『ヴィトゲンシュタインと現代哲学』（1970年）をはじめとして9冊にのぼり、論文・学会発表は9、書評・評論9などが数えられます。

飛田先生は、学部・大学院を通じて本学文学部の故山元一郎教授の指導のもとに、ヴィトゲンシュタイン哲学の研究を始められ、やがてその「人と思想」に深く傾倒されつつ、その哲学の研究を主要な研究課題として業績を展開してこられました。このことは先生の研究論文の表題からもうかがうことができますが、今春には『ヴィトゲンシュタイン哲学の研究』が富士書店から刊行される予定で、これまでの先生の長年にわたるご研究の集大成となるものと期待されています。

飛田先生は、このようにヴィトゲンシュタインの研究を基本的な課題としてこられました。そこからさらに分析哲学一般にもその視野を広げられ、多くの著作や翻訳書を世に出されました。また、日本哲学会や関西哲学会、それに日本科学哲学会、日本イギリス哲学会などにおいて、分析哲学および論理実証学派を擁護する立場から、活発な学会活動を展開してこられました。

さらに、多くの編著書や翻訳書などを企画される中で、それらに若い研究者を登用されることによって、次代を担う研究者を育ててこられたことも、先生の学界におけるご貢献の一つとして特筆されるべきことでしょう。先生から仕事の機会を得たことを契機に世に出た若い分析哲学研究者が、今日数多く学界で活躍していることが、このことを如実に示しています。このように飛

田先生はわが国の分析哲学界において、60年代以降の大きな興隆の一翼を担われたのであり、また今日も担っておられるのであります。

他方、学内では飛田先生は、1982年4月から2年間は二部協議会協議員として、二部改革の一連の動向にあって、経済学部二部教務主任の任にも当たられました。また、1986年4月から3年間は人文科学研究所専任研究員として、第三期総合研究「日本を基点としてみた国際摩擦と国際理解」を総合テーマに学際的な共同研究に従事され、その成果を『国際摩擦と国際理解』全3巻の1巻として『国際化と異文化理解』にまとめあげる責任を果たされました。

今日、21世紀を目前にして、国際化・情報化・人間化・個性化やグローバル化・ボーダーレス化・ローカル化などが言われる中で、これからの大学における研究と教育、それに経済学部の在り方についても、多方面からする広く深い問い直しが必要となっていると思われまます。こうした時期に、いま飛田先生をお送りすることは本学として、また本学部として誠に惜しい限りであります。これも時の定めかと思われまます。私ども経済学部教授会は、先生の長年におよぶご功績に対して名誉教授の称号をお贈りすることによって、私どもの微意を表したいと考えまます。

今後とも一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げるとともに、先生の今後のご健勝と一層のご活躍を心から祈念して、送別の言葉とさせていただきます。

1995年2月